雛の館－資料４

絵草紙（桜井正太家蔵）

江戸中期の雛飾りの姿が偲ばれる軸装である。茵の上に座ったお内裏さまは古今雛で、両サイドに犬筥が置かれ、お供え物も整然と捧げられている。ちなみに、内裏の配置は、「天子南面にして、日の出づる方を上位とする」という故事にもとづいている。

古今雛（槙 邦彦氏蔵）

明和（１７６４～）の頃江戸日本橋人形町の雛職人である原舟月が、池の端の大槌屋の要請により新型の雛を開発、これを「古今雛」と称し世に送り出し大変な好評を博する。

本品は、原舟月の作と思われる。女雛の装束の端袖は、幸菱の単を表し、宝冠は簡素ながら瓔珞が美しい。

初参稚児人形（鹿野和夫氏蔵）

紅縮緬の振袖に若松と梅花。鶴を刺繍した晴着に、袴をつけた稚児人形で、初春に行儀よく正座した姿は可憐である。頭髪はもともと稚児髷であったようである。高さは１１ｃｍ。

古今雛（影澤照也氏蔵）

本品は江戸後期の作で、玉眼である。男雛の束帯と女雛の表衣は共切れで作られているが、唐衣が大きいため垣間に見えるようになっている。面立ちは美しくおごそかな容姿をしている。

享保雛（河北町所蔵）

江戸中期の享保期（１７１６～３５）に発達した町方の内裏雛として京都に生まれる。本品は享保６年（１７２１）触書によって、雛の寸法を約２４ｃｍまでと定められた後の作品であろう。紺地金襴の共裂で装束をつくり面立ちは気品に満ちていて、均整がとれていて優美な雛である。

五人囃子（鹿野俊朗氏蔵）

寛政１２年（１８００年）に出版した「戯子名所図会」にすでに雛壇にあらわれているように、江戸後期に五人囃子が世に姿を現す。本品は、その頃の五人囃子であろう。

頭は童顔で切り目囃子方

の特徴をあどけなく表現している。紅縮緬に海辺の松原と帆掛け船の刺繍を振袖に、牡丹唐草紋の裃を着けている。高さ２３ｃｍ。

隨身（鈴木昌之氏蔵）

隨身は明和（１７６４～７２）の頃すでに京都で生まれていたと言われている。本品は、冠と一木づくりの面、目は切り目で威厳のある面立をしている。束帯は、向って右が上位で従四位以上の黒袍、向って左が下位で五位以下の赤袍の有職を見立て、色別した緞子の生地でつくられている。隨身の初期段階の作品と推察される。

三人官女（河北町所蔵）

天保（１８３０）頃になると初めて官女が雛段に飾られてくる。従って三人官女は江戸後期が初見となる。本品は明治期の作と思われ、有紋の振り袖に緋長袴を着け、中央の留袖の官女は既婚者を表すと言われている。

古今雛（鹿野俊朗氏蔵）

本品は、明治初期の作で、一般的に江戸雛と称している。女雛の端袖は、フランネルの着地に刺繍をほどこしている。融和な面立をしている。

享保雛（槙 真司氏蔵）

享保雛は、元禄雛の流れを汲んで、装束は金襴や錦の裂地を主流に仕立てている。元禄以降の太平を謳歌するかのように、雛も豪華絢爛となっていく。容姿も独創的に大型化する。享保６年の御触書によって寸法に制限が定められる。本品はその時の作品であろう。

古今雛（鹿野和夫氏蔵）

本品は、江戸後期の初め頃の作品で京都製である。束帯と女雛は共裂でつくられ、男雛の表袴は露文、女雛の袴は紅縮緬地で縫製されている。面立ちは切れ目で曲雅な容姿をしている。

古今雛（竹谷義一氏蔵）

本品は、京都製で江戸後期であるが、古今雛の初期的な作風と思われる。紺地金襴地の束帯と女雛の表衣は共裂を用い、特に女雛は、王朝時代の女性の玉座と言われる右膝を立てているのが珍しい。